

God With Us

Part 5: Soul Songs

Job-Psalm

Message 8 – Song of Praise & Thanks

Psalms 100 & 139

神は我らと共に
パート5：魂の詩
ヨブ - 詩篇

第8メッセージ—賛美と感謝の詩
詩篇100篇と139篇

はじめに

主への感謝と賛美の詩が全詩篇を占めている。その理由は、神に感謝するという行為が神を敬うという行為だからである。神は動物の犠牲と燔祭をお喜びにならないことを明らかにされた後、次のように宣言された：感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き者に果せ。感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる。自分のおこないを慎む者はわたしは神の救を示す」。(詩篇50：14, 23) 私たちは公私において、感謝の気持ちを示すべきである。

様々な賛美と感謝の詩は重複しているところがある。一般的な分類は次の通りである：

公的感謝の詩篇：65, 67, 75, 100, 105, 107, 124, 136

個人的感謝の詩篇：21, 30, 34, 40, 66, 92, 108, 116, 138

賛美の詩篇：18, 32, 41, 95, 96, 98, 103, 104, 106, 111, 112, 113, 117, 118, 145-150

公的賛美の呼びかけ： 詩篇100篇

詩篇100篇は、古典的な短い賛美の呼びかけである。イスラエルの三大年次祭のための人々の集いの際に用いられていた可能性がある。今日でも、礼拝の初めに神の宮に入る際の感謝の叫びの詩として頻繁に用いられている。

全地よ、主にむかって喜ばしき声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。歌いつつ、そのみ前にきたれ。主こそ神であることを知れ。われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。われらはその民、その牧の羊である。感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。主は恵みふかく、そのいつくしみはかぎりなく、そのまことはよろず代に及ぶからである。(詩篇100篇1-5)

私たちはどのように感謝と賞賛を表すべきでしょうか？喜びを持って歌い、喜びをもって仕えるべきである。なぜなら私たちは神によって創造され、神が良くして下さり、愛情と忠実さをも与えて下さったからである。簡単に言えば、主なる神は、感謝と賞賛に値するお方であるので礼拝するのです。感謝と賛美を通して、神の牧草地の羊であることは、特権であり、神無しの人生を望まないという意思表示である。

礼拝とは、神に「価値を宣言する」ことである。神の価値は尊く、賛美することは、神への最高の愛の価値があると宣言している。例えば、主は大いなる神で、大いにほめたたえられるべきです。その大いなることは測り知ることができません。(詩篇145：3) 主は恵みふかく、あわれみに満ち、怒ることにおそく、いつくしみ豊かです。(詩篇145：8)

賛美は、神がして下さった事柄ではなく、神が誰であるかに焦点を当てている。賛美はあなたが神について愛するすべ

ての事柄を神に伝える行為である。神を賛美する時、どれ程神を愛しているかを伝えることによって神を祝福することになる。同時に、神が誰であるかを覚え、神が生活のあらゆる側面に密接に関わって下さっていることを覚えるとき、私たちの信仰は深まる。主にとって不可能なことがありますか。(創世記18:14、エレミヤ書32:17, 27; ルカ18:27)

注意：感謝を捧げることは、個人の生活や愛する人々の生活のための神の保護に焦点を当てている。つまり、神がして下さったことに焦点を当てているので、「感謝」を捧げることは「賛美」を捧げることと異なる。

個人的賛美は、神への信頼と神への愛を育むために非常に重要である。他の信者と共に公に賛美を捧げるとき、共に神への愛を伝えることが出来る。音楽に合わせての賛美は、単に歌を通して宣言するということである。神がして下さったことに焦点を当ててではなく、神とそのご性質に焦点を当てることこそが賛美のすべてである。私たちが集結し、一丸となって心から神に賛美を捧げるとき、神を敬うことになる。

神に畏敬の念を抱く個人的反映：詩篇139篇

詩篇139篇は、神との関係の驚異について、ダビデ自身が個人的に記した詩の様である。その中で、ダビデは一度だけ神に「感謝」を捧げることに触れている(14節)が、全体的には、ダビデにとっての神のご臨在への感謝の詩である。詩篇の終わりに向けて、邪悪な者を扱われる神の正義を反映するために、敵たちとの闘いの時に記されたものかもしれない。神についての多くの事柄がダビデの心を捉えた。神がダビデと関わって下さった感謝するべく5つの具体的な方法に焦点を当てている。

1. 神は全てご存知である：(1-6節)

神は全知であられる(Omniscient)。つまり、神は全てを完全に知っておられる。ダビデは先ず、神が個人的、かつ親密にダビデについて、すべてを知っておられるという事実に対する不思議を表現している。

主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。あなたはわがすわるをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもろもろの道をことごとく知っておられます。わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます。このような知識はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。これは高くて達することはできません。(詩篇139:1-6)

神は、思いと言葉と行動の全てをご存じであるだけでなく、「後ろから、前から包囲し」慎重に見守り、保護して下さい。神との個人的な親密さを知ることの不思議のあまり、ダビデは圧倒された。

神が、ダビデ自身の人生に非常に個人的な方法で触れて下さった感覚について思いを巡らしていたことが明らかである。それは大変重要な教訓である。神は個人的に関わって下さるお方である。一人一人を個人的にご存知であられる。個人的な神との体験を思い、声にして賛美する時間を確保しておられるでしょうか？最近、神があなただけのために「触れて」下さったことを確信したことは無かったですでしょうか？神を体験させて下さったことを神に感謝しましょう。

2. 神は行く先々で共にいてくださる：(7-12節)

神は遍在される(Omnipresent)。つまり、神は、常にどこにでも完全に存在される。ダビデは、神が人生の至る場所に、最も暗い谷や、最も恐ろしい場所でさえも、共に行って下さったということを確認させられた。

わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。わたしがあげぼのの翼をかって海のはてに住んでも、あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。「やみはわたしをおおい、わたしを囲む光は夜となれ」とわたしが言っても、あなたには、やみも暗くはなく、夜も昼のように輝きます。あなたには、やみも光も異なることはありません。(詩篇139：7-12)

以前、ダビデは保護して下さる「神のみ手」について記したことがある(5節)。ダビデの歩みの一步一步の中で、神について学びつつ、ここで再び「神の御手」について述べている(10節)。ダビデにとって、神の個人的なご臨在から離れられる場所はこの世に存在しなかった。

私自身、人生の困難な時期に立たされている時、常に神が共にいて下さることを確信し続けていることは困難である。非常に孤独に感じる。それでも神は、そこにいて下さっているという事実を知ることによって、孤独に感じる状況にあっても、神に繋がりを続けることを可能にしてくれる。主は、「わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。(ヘブル人への手紙13：5)ときには、後々まで神が共にいて下さったという確信が得られないこともある。

詩篇139篇は、宇宙の中に神が存在しない場所は断じて存在しない現実を宣言している。あなたは見捨てられ、孤独に感じておられるでしょうか？これらの聖句に焦点を当てる時を是非確保して下さい。神は、あなたの行く先々で共にいて下さるといふ真実を知ることによって慰められるでしょう。

3. 神は巧みに目的のために私を形作られた：(13-16節)

さらに神は、ダビデが生まれる前からご存知であられたことに驚嘆した。ダビデがまだ母の子宮にいる間から、すべてあらかじめ計算され、定められ、特定の目的のために、恐ろしい程、素晴らしくダビデをつづり合わされた。

あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。わたしはあなたをほめたたえます。あなたは恐るべく、くすしき方だからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合されたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかったとき、その日はことごとくあなたの書にしるされた。(詩篇13-16)

ダビデの命は、誕生から始まったのではなかった。神が巧みにダビデを形成され、その命の日数を定められ、"まだそれらの一日も始まらないうちに" "始まった。神の保護は母親の胎内に宿った瞬間に始まる！

誰もが、神の完全な関与によって創造された。あなたが持って生まれた特性のすべてが神の手仕事の一部であることを神に感謝しましょう。「もっと、こうありたかった。」とか、「この部分を持って生まれなければよかった。」などと

思われたことはありませんか？それらの後悔を、あなたを創造して下さった神に感謝する機会へと変えることを選択して下さい。特に、日頃頻繁に不平に思いがちな事柄について、逆に感謝しましょう。あなたは恐ろしくも素晴らしくも、神の御手によって創造されたのですから！

4. 神様は関わって下さる：（17-19節）

神は（全ての上に）超越的であられ、かつ（全ての内、全てを通して）内在される。神が超越的であられるということは、つまり、神ご自身が人生のあらゆる場面において、個人的に、親密に関与して下さっているということである。神は「私たちと共に」いて下さっており、遠くから、ただ見ておられるだけではない。神は、私たちのことで頭が一杯であり、生活のあらゆる瞬間に従事して下さっている。ダビデは、常に自分に向いて下さっていた神の思慮深さに深く感動した。

神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょうか。その全体はなんと広大なことでしょうか。わたしがこれを数えようとすれば、その数は砂よりも多い。わたしが目ざめるとき、わたしはなおあなたと共にいます。神よ、どうか悪しき者を殺してください。血を流す者をわたしから離れ去らせてください。（詩篇139：17-19）

砂浜には何兆もの砂の上に更に何兆もの砂が覆い重なっている。それ程の数の思いを神はあなたに寄せて下さっているという事実を想像してみてください。そのことに気が付くとき、自分が神にとって、それ程までに特別な存在であるということが非常に尊く感じられる。おそらく、あなたのことをそれ程まで想い、理解してくれている人など存在しないと思われるに違いありません。しかし神が、それ程までも想って下さ

っているのです！そのことに気が付かれたなら、常にあなたについて考えて下さっている神様に感謝を捧げましょう。あなたは信じられない程に、神の目に尊いのです！

5. 神は敵（ダビデの敵も）をご存知である：（20-22節）

ダビデには敵が大勢いた。しかし、ダビデにとって何より重大であったのは、敵どもが皆ダビデの神を憎んでいたことであつた。人々が神の御名をむやみに唱えるとき、ダビデは心から悲しんだ。神に対する愛の証として、尊い神を嘲笑し、軽蔑した者に対する憎しみを表明した。そして何より、神がすべての敵を完全にご存知であられたことを知り、すべての人々と完全に関与しておられることを知り、慰められた。

彼らは敵意をもってあなたをあなたより、あなたに逆らつて高ぶり、悪を行う人々です。主よ、わたしはあなたを憎む者を憎み、あなたに逆らつて起り立つ者をいとうではありませんか。わたしは全く彼らを憎み、彼らをわたしの敵と見ます。（詩篇139：20-22）

「ダビデの子孫」からお生まれになったイエス・キリストがこの世におられたとき、私たちの敵への態度（と祈り）に関してより高度な基準を設定された。イエス様は、私たちが憎む者を愛するようと言われた（マタイ5：43-48）。なぜでしょうか？その理由は、神ご自身がそのように私たちが愛して下さっているからである。神を「憎む者」を憎まれない。嘲笑や無礼にもかかわらず、神は人類を愛され、引き続き手を差し伸べて下さるお方である。絶えず神のご性質を表さない様な思いを抱いたり、振る舞いを繰り返す者であっても、神の憐みの内にあり、神を無視したり、軽蔑したりする者であったとしても、それでもなお、神は愛して下さる。

神の更なる調べを求める締めくくりの祈り：（23，24節）

ダビデは、神が内在する陰をどのように「お調べになる」かについて記し、結論へと向かう。ダビデは冒頭において、神は、わたしを探り、知りつくされていると記しているが、更に、神に内面を深く探っていただくよう招きながら締めくくる。具体的に、心の中に埋もれている「害となる部分」を探し出し、その領域に癒しをもたらして下さるよう神に求めた。

神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください。（詩篇139：23，24）

神の御霊は目に見えない（しかし、神には見えている）心の奥深くに隠れている事柄を照らしたいと望んでおられる。もし神がそれらをあなたに示して下さったなら、その啓示を快く受け入れることが出来ますか？ダビデは、神に調べていただき、内に隠れ潜んでいる傷を明らかにして下さいと求めた。そのためには、一人になり心を静め、神の御霊に心を開く時を要する。恐れることは何もありません。神のお目的は、あなたの心の深いところに癒しをもたらすことである。

最終的思想：感謝、それとも不平？

神を褒めたたえ、感謝を捧げることによって、謝意を示す。感謝の反対は不平である。私たちは一丸となって、常に神を褒めたたえ、感謝をささげ続けることが重要である。そうでなければ、必然的に不平、非難、苦渋、欲求不満、恐怖へと引き寄せられてしまう。賛美と感謝は優雅な、慈悲深い神に対する適切な反応である。あなた自身のためです！心が信頼、慰め、畏敬、勇気、平安、敬意、尊敬で満たされるからです。子供に親であることを感謝されて微笑まない親がいるでしょ

うか？同様に、神への感謝の気持ちが天の父を喜ばせ、あなたの魂を持ち上げて下さる。